あいつは昔からそうだ

3007

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あいつは昔からそうだ

【Ｎコード】
Ｎ６３８６Ｆ

【作者名】
３００７

【あらすじ】
あいつは昔からそうだ。何を考えてるか分からない。そんな親友に頼んだ結婚式の乾杯の挨拶。それは実にあいつらしい物だった。

あいつは昔からそうだ。親友の結婚式だというのに感動する素振りすら見せず、ただ飯を喰ってはだるそうに過ごしている。「結婚式をなんだと思っているんだ」こんな事を周りの人達は思っているだろう。

しかし、あいつを知っている人間からしたら何ら不思議な事ではない。逆にあいつが感動の涙でも流してみればそれは大事件だ。１５年の付き合いだがあいつが涙を流したのは高校の卒業式の時だけだ。俺が知り合う前の話を聞いても涙を流した感じは無い。何度かあいつの涙が見たく全米が無く映画を見せても感想は「いい作品」の一言だけだった。そんなあいつが結婚式で泣く様な事があれば大雪どころじゃない、ＵＦＯが襲撃してくるだろう。

しかし、そんな心配は無い。今は自分達夫婦の馴れ初めより目の前にある飯を平らげるのに神経を使っている。それにしてもあいつは乾杯の前に一体何杯飯を食べる気なんだ。あいつ、いつもはそんなに食べる奴じゃないだろ。１５年経った今でもあいつの事はいまいち理解出来ない。

こんな奴だから第一印象こそ自分勝手ぽくて良いイメージを持てなかったが、あいつと仲良くすると自分勝手では無い事が重々分かった。何故なら、あいつは自分勝手以前に何も考えて生きていないからだ。

基本的に雰囲気で生きている。だから２７歳になった今でも中学生の頃と何一つ変わっていない。現に今日も結婚式だというのに普通の私服で来やがった。丁度あいつと玄関で会ったから良かったもの

の会っていなかったらこの席に座っていなかったかもしれない。こんな事を普通の２７歳がするだろうか。こんな事を毎回の様に見せられると本当に生活出来ているのか心配になる。
ちゃんと仕事をしているのだろうか、きちんと家事は出来ているのだろうか、ちゃんと親孝行出来ているのか。２７歳のおっさんが心配する事ではないと思うが、どうしても心配になる。
しかし、あいつは人がこんな心配をしているとは気にもしないで飯を食べ続けてる。
ご祝儀の元を取り返そうとしているのか、ただ単に腹が減ってるだけなのか。それは自分には分からない。もしかしたらあいつ自身も分かっていないかもしれない。

せっかくの結婚式だというのに、まるであいつが主役なのかと間違えるぐらい集中出来ない。しかし、次の主賓祝辞ではさすがのあいつも箸を休めてきちんと話を聞くだろう。主賓祝辞は高校の時の恩師に頼んでいる。恩師と言っても正直あの人を先生として今でも認めていない。タバコを吸う為に授業を止めたり、ＨＲ何て滅多に顔を出した事がない。自分達が生徒だから良かったもの普通の生徒だったら訴えられて、あの人はただのバスの運転手になっていただろう。あの先生のせいで二項定理は未だに解けない。
そんな先生だが色々とお世話になった。自分が退学になりかけた時も親以上に頭を下げてくれたのはあの先生だった。あの先生のお陰でこうして社会に進出できたのかもしれない。
そして、何よりも自分とあいつが喧嘩していた時に仲直りの手助けをしてくれたのは先生だった。
今もこうしてあいつと仲良く出来ているのは、あの恩師が教えてくれた「人の個性」という物なのかもしれない。こういった事ではあいつも同じくらいあの人を尊敬しているだろう。
そんな恩師が贈る言葉。その言葉をさすがのあいつも飯を食べながら聞くということはないだろう・・・

眠ってる。

恩師の言葉を聞いてすらいない。
あいつは本当に何を考えてるんだ。ましてや次の乾杯の合図はあいつに任せてるというのに。そろそろ祝辞も終わりに近づいている、どうにかこの良い流れを止める前に起きてくれ。

「以上で話を終わりにしたいと思います。この度はご結婚おめでとうございます」

あぁ、せっかくの順調に進行していたのに、こんな事なら奥さんの言うことを聞いて他の奴に頼めば良かった・・・

「続きまして、新郎様のご親友によります乾杯の挨拶です。それではどうぞ」

「えぇっと只今ご紹介に上がりました親友の・・・」

俺は驚いた、さっきまで眠っていたあいつが何事も無かった様に立ち上がりきちんと挨拶をしている事に。

「えぇ、この場で言う事ではないですが、自分は常識やマナーという言葉から掛け離れた生活をしています。ですから結婚式で使ってはいけない言葉など良く分かりません。という訳でいらない事をいう前に手短に伝えたいと思います。
人生ＨＡＰＰＹ死にやしない、人は笑っていれば死なない様に出来ている。
新郎と新婦はそんな関係だと思います。そして、これからもそんな結婚生活を続けるでしょう。本当に今回はご結婚おめでとうございます。それでは乾杯」

あいつらしい挨拶だった。
全員が唖然している中で俺の拍手だけが城内を包んだ。

その後はさっきと変わらずに飯を食べてはだらだらと過ごす。こんな光景を何度か目にした。でも、このいつもと変わらない雰囲気があいつにとっての祝福だと考えている。

そして、結婚式を終えて仲間内だけの二次会。
話は乾杯でのあいつの挨拶で持ちきりになった。そして、恩師が途中から来ると高校時代のあいつの話へと変わっていった。
いつもそうだ、あいつは自分が脇役だとしても最終的にスポットライトを自分へと向ける。

すると、一人の友達が気付いた様に喋りだした。

「そういえばあいつの姿が見えないな。もしかして帰ったのか？あいつらしいな」

あいつは結婚式が終わると同時に姿を消した。
おそらく今頃あいつは電車の中で眠ってるだろう。
あいつは昔からそうだ。酒を飲まずにコーヒーばかり飲む時は深夜まで起きていて眠い時だ。あいつなりに頑張っていたのだろう。

そして、二次会の内に自分は何度か同じ事を言われた。

「やっぱり、あいつとお前は一生仲良しだな」

確かにあいつとは一生仲良しになるだろう。
あいつの面倒を見れるのは俺しか居ないんだから。

（後書き）

最後までご朗読ありがとうございました。
出来れば今後の執筆活動の参考にしたいので感想・評価の方をよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6386f/

あいつは昔からそうだ

2010年10月30日04時57分発行